

学位論文抄録

日本における高齢者のうつ状態の有病率と危険因子についての地域差異
(Regional differences of the prevalence of and risk factors for elderly depression in Japan)

阿部 恭久

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

指導教員

池田 学教授

熊本大学大学院医学教育部博士課程医学専攻神経精神科学

学位論文抄録

[目的] わが国においては1998年以降、自殺者が毎年3万人を越える高止まりの状況が続き、先進国の中でも最も深刻と言われている。自殺者の中に高齢者の占める割合は高く、今後ますます高齢化が進むわが国において、高齢者のうつ病対策は国を挙げての喫緊の課題である。一方、わが国において高齢者のうつ病の地域比較を行った報告はこれまで殆どない。今回われわれは、より効果的な高齢者のうつ予防対策を考える上での基礎資料とするために、熊本県内の都市部と山間部において高齢者のうつ状態に関するアンケート調査を行い、高齢者のうつ状態に関連する因子および危険因子の地域差異について比較検討を行った。

[方法] 熊本市及び阿蘇圏域の市町村の協力を得て、住民基本台帳をもとに同地域に在住する65歳以上の高齢者の中から無作為抽出法にて対象者を選択した。調査は郵送調査法にて行った。2152名から有効回答が得られ、うつ状態はGeriatric Depression Scale (GDS)にて評価を行った。うつ状態に関連する生活環境や習慣、健康状態についても質問を行った。また生きがいや主観的幸福感の評価を行うためにPhiladelphia Geriatric Center Morale Scale (PGC-MS)を使用した。

[結果] クロス集計の結果、うつ状態は独居、無職、持病、睡眠障害、希死念慮、経済的困窮、社会的サポートの乏しさと関係しており、これは両地域ともに違いはなかった。しかしロジスティック回帰分析の結果では3つの因子（経済的困窮、無職、PGC-MS）では両地域ともに有意なオッズ比が得られたものの、睡眠障害については熊本市でのみ、社会的サポートの乏しさについては阿蘇圏域でのみ有意なオッズ比が得られ、都市部と山間部での危険因子の差異を認めた。

[考察] 都市部と山間部では、高齢者のうつ状態の危険因子に違いが認められることから、地域特性を考慮した対策が望ましいと考えられた。

[結論] 都市部と山間部で、うつ状態に関連する因子に大きな違いは認められなかったものの、危険因子には差異が認められた。地域特性を考慮することで、より効果的なうつ対策につながる可能性が示唆された。